

# 古英語 *toweorpan*, ラテン語 *destruere* と ギリシャ語 *κατάγειν* について

石 原 覚

## I

以下は、作者が神に自分の敵の懲らしめを懇願する *Psalterium Romanum* の一節である。この箇所には「滅ぼす」の意味を持つ動詞 *destruere* が用いられている。

- (1) *ne occideris eos nequando obliuiscantur legis tuae disperge illos in uirtute tua et destrue eos protector meus Domine (PsRom 58:12)<sup>1)</sup>*

(彼ら [我が敵たち] を殺し給うな、彼らがあなたの法を決して忘れぬように。あなたの力をもって彼らを散らし、彼らを滅ぼし給え、我が防御者である主よ。)

- (1) の *destruere* は、古英語の韻文訳詩篇において、次の (2) におけるように、同じく「滅ぼす」を意味する動詞 *toweorpan* へと訳されている。

- (2) *... Ac þu hi wide todrif þurh þines wordes mægen, and hi wraðe toweorp, wealdend min drihten. (PPs 58.10–11)<sup>2)</sup>*

(……あなたの言葉の力をもって彼らを広く散らし、怒って彼らを滅ぼし給え、我が支配者、主よ。)

また (1) の *destruere* は、古英語の詩篇行間注解 (*Psalter gloss*) のうち、A～E<sup>3)</sup> のラテン語本文 (いずれも *Psalterium Romanum* である) に見出されるが、A～C において、次の (3) に見られるごとく、*toweorpan* を訳語として与えられている。<sup>4)</sup>

- (3) *... tostregd hie in megne ðinum & toweorp hie gescildend min dryhten (PsGIA 58.10–11)*

本稿では、(1) の *destruere* が由来するギリシャ語原文、すなわち七十人訳聖書 (LXX) における *κατάγειν* が、LEH<sup>5)</sup> がこの *κατάγειν* が表すとす  
る意味においてのみならず、別の意味においても捉えられることを示し、  
後者の意味が、そのラテン語の訳語である *destruere* には、またその古英

語の訳語である *toweorpan* には見出されないことを指摘したい。

## II

本章では、*toweorpan* と *destruere* がいくつかの用法を共有するため、訳語と原語の関係となることを示す。

まず *toweorpan* と *destruere* は、文字通りの意味において用いられるとき、次の (4)(5) におけるように、物を取り壊すことについて用いられる。

- (4) *Ɔa comon ǰær fleogende færlice englas of healicro heofenan. and hi Ɔæt hus towurpon. Ɔurh gastlicre cræft. ǰam godan to blisse; (ÆCHom II, 39.1 293.187)<sup>6)</sup>*

(すると突然高い天より天使たちが飛来し、彼らは、良き人 [Martinus] が喜んだことに、その [悪魔たちに捧げられた] 家を霊的な力により壊した。)

- (5) *Ut navem, ut aedificium idem destruit facillime qui construxit, sic hominem eadem optime quae conglutinavit natura dissolvit. (CIC. Cato 72)<sup>7)</sup>*

(船や建物は、それを建造した同じ人が、最も容易に取り壊すごとく、人間は、それを結合した同じ自然が、最も良く分解する。)

次にこれら 2 語は、比喩的用法において、以下の (6)(7) に見られるごとく、人を滅ぼすことについて用いられる。

- (6) *Ɔa ic in mode minum hogade Ɔæt ic wolde towerpan wuldres leoman, bearn helendes, agan me burga geweld eall to æhte, and ǰeos earme heap Ɔe ic hebbe to helle ham geledde. (Sat 84)<sup>8)</sup>*

(それから私は我が心に思った、私と私が地獄へ連れ戻したこの哀れな群れが、街々を完全に支配せんがため、栄光の光、救い主の子を滅ぼさんと。)

- (7) *ita foris claros domestica destruebat infamia, et ne maximi cives haberentur, hoc efficiebatur, quod mariti minores erant. (PLIN. paneg. 83)<sup>9)</sup>*

(かくして家庭の悪評が外部で名声を持つ者たちを破滅させ、夫として劣っていることが最良の市民であると見なされることを妨げた。)

さらにこれらの語は、比喩的に用いられる際、次の (8)(9) におけるごとく、抽象的な事物を損なうことについて用いられる。

- (8) *ac Ɔonne se stearca wind cymǰ norǰaneastan, Ɔonne toweorpǰ he swiǰe*

*hraþe þære rosan wlite*; (Bo 9.21.5)<sup>10)</sup>

(しかし強い風が北東から来ると、それはたちまち薔薇の美しさを台無しにする。)

- (9) *Tantum, ne pateas verbis simulator in illis, Effice, nec vultu destrue dicta tuo.* (OV. ars 2, 312)<sup>11)</sup>

(ただし、こうした言葉が偽りであることが知られないようにし、口にしたことを、あなたの顔つきで打ち消さないようにせよ。)

以上示したごとく、*toweorpan* の用法と *destruere* のそれには共通するものがあるため、以下の (10)~(12) に見られるように、前者は後者の訳語として用いられる。(以下 *toweorpan* と *destruere* の対応関係を明らかにするため、古英語訳とラテン語原文を並べて引用する。) (10) では、「(物体を)破壊する」を意味する *destruere* を訳すのに *toweorpan* が用いられている。

- (10) *Ðes sæde ic mæg towurpan Godes templ. & æfter þrym dagum hyt eft getimbrigean.* (Mt (WSCp) 26.61)<sup>12)</sup>

(この者は、「私は神の神殿を破壊し、3日後にそれを再び建てることができる」と言った。)

*hic dixit possum destruere templum Dei . . .* (Mt)<sup>13)</sup>

(この者は、「私は神の神殿を破壊し、……できる」と言った。)

- (11) においては、人を目的語とする *destruere* が *toweorpan* に訳されている。  
(11) *Þæt hi doð to bysmore þinum feondum; for ðam þu towyrpest þine fynd, and ealle þa þe unrihtwisnesse ladiað and scyldað.* (PPs (prose) 8.3)<sup>14)</sup>

(彼ら [幼子ら] は、あなたの敵たちを嘲る。そのためあなたは、あなたの敵たちと、不義を許し擁護するすべての者たちを滅ぼす。)

*. . . ut destruas inimicum et defensorem* (PsRom)

(……あなたが敵と擁護者を滅ぼすようにと。)

- (12) では、抽象名詞を目的語とする *destruere* を訳すのに *toweorpan* が用いられている。

- (12) *& he ðone toworþnan steal þæs rices, þeah ðe hit wære binnan nearwum gemærum, eaðelice geedneowade.* (Bede 4 27.360.2)<sup>15)</sup>

(彼 [Ealdfrīð] は王国の崩壊した状態を、狭い領域内ではあったが、容易に回復した。)

*destructumque regni statum, . . . nobiliter recuperavit.* (BEDA. Hist.eccl. 4.26, 430)<sup>16)</sup>

(彼は王国の崩壊した状態を、……見事に回復した。)

以上から、問題の(2)(3)に見られるごとく、*destruere*を訳すために *toweorpan* が用いられる——人を目的語として「滅ぼす」の意味で用いられた *destruere* が *toweorpan* に訳される——のは自然なことであると言える。

### III

ここで(1)のギリシャ語原文である次の(13)を見てみると、問題の *destruere* は *κατάγειν* に由来することがわかる。

- (13) μὴ ἀποκτείνης αὐτούς, μήποτε ἐπιλάθωνται τοῦ λαοῦ μου· διασκορπίσον αὐτούς ἐν τῇ δυνάμει σου καὶ κατάγαγε αὐτούς, ὁ ὑπερασπιστὴς μου κύριε. (LXX Ps. 58(59).12)<sup>17)</sup>

(彼らを殺し給うな、彼らが我が民を決して忘れぬように。あなたの力をもって彼らを散らし、彼らを滅ぼし(おろし)給え、我が防衛者である主よ。)

この *κατάγειν* という動詞は、以下の(14)(15)に見られるように、「(人をおろす)」という移動についての意味を持つ語である。(14)では、そこから人をおろす、より高い場所が、(15)では、そこへと人をおろす、より低い場所が示されている。

- (14) ὁ καταγαγὼν βασιλεῖς εἰς ἀπώλειαν καὶ δεδοξασμένους ἀπὸ κλίνης αὐτῶν (LXX Si. 48.6)

(王たちを破滅へと、名誉ある者たちを寝台から、おろした者。)

- (15) καὶ συνάξω πάντα τὰ ἔθνη καὶ κατάξω αὐτὰ εἰς τὴν κοιλάδα Ἰωσαφατ . . . (LXX Jl. 4.2)

(私は諸国民をすべて集め、彼らをヨーサファトの谷へと下らせ、……)

では(13)の *κατάγειν* も「おろす」の意味で捉えられるであろうか。

この点に関してまず重要なのは、(13)の *κατάγειν* が、(14)(15)におけるのとは異なり、目的語のみを伴い、位置を表す表現を伴わないことである。

また Euthymius Zigabenus (11~12世紀)<sup>18)</sup> は詩篇58:12の解釈において、以下のごとく *ταπεινοῦν*(低める)により(13)の *κατάγειν* を解釈している。

Ἀλλὰ διασκορπισθῆναι αὐτούς, ἡττηθέντας, καὶ ταπεινωθῆναι, καὶ οὕτω βελτιωθῆναι. . . Κατάγαγε δὲ, ἀντὶ τοῦ Ταπεινώσον.<sup>19)</sup>

(負かされた彼らが、散らされ、低められ、かくして改善されるように。  
……「おろし給え」は、低め給え、の言い換えである。)

この *ταπεινοῦν* という動詞が、対象を移動させるのではなく、その高さを変化させることについて用いられることは、例えば次の (16) から明らかである。

(16) *πᾶσα φάραγξ πληρωθήσεται καὶ πᾶν ὄρος καὶ βουνὸς ταπεινωθήσεται*, (LXX *Is.* 40.4)<sup>20)</sup>

(すべての谷は満たされ、すべての山と丘は低められるであろう。)

さらに (13) の *κατάγειν* は、(1) におけるように、「滅ぼす」という移動とかかわりのない意味を持つ *destruere* により表される。<sup>21)</sup>

以上から (13) の *κατάγειν* は、LEH がそれを「(或人を) 倒す (比喩的)」(*“to bring down [τινα] (metaph.)”*)<sup>22)</sup> の語義のもとに挙げているように、移動を表す「おろす」の意味ではなく、移動と無関係な「倒す、滅ぼす」の意味で捉えることができると言える。

(13) におけるごとく、神を主語とし、人を目的語をとして、神からの罰について用いられた *κατάγειν* の例としては、LXX からさらに以下の (17) (18) を挙げることができる。<sup>23)</sup>

(17) *ὑπὲρ τοῦ μηθενὸς σώσεις αὐτούς, ἐν ὀργῇ λαοὺς κατάξεις, ὁ θεός*. (LXX *Ps.* 55(56).8)

(あなたは決して彼らを救わず、怒りをもって民らを滅ぼす (おろす) であろう、神よ。)

(18) *ἐν ἀπειλῇ ὀλιγώσεις γῆν καὶ ἐν θυμῷ κατάξεις ἔθνη*. (LXX *Hb.* 3.12)

(あなたは威嚇をもって地を縮小し、怒りをもって諸国民を粉碎する (滅ぼす、おろす) であろう。)

(18) の“*κατάξεις*”は、ヘブライ語原典の *נָחַץ* (踏みつける) に由来するため、厳密には *καταγνύναι* (粉碎する) の未来形と考えられる。<sup>24)</sup> しかしこの語形は、*κατάγειν* の未来形の“*κατάξεις*”——(17)のそれはヘブライ語原典の *נָחַץ* の Hiphil (おろす) に由来する——と同形であるため、ヘブライ語原典を考慮に入れなければ、(18)の“*κατάξεις*”を *κατάγειν* の未来形と捉えることは可能である。<sup>25)</sup>

ここで注目すべきは、(17)(18)において *κατάγειν* が、目的語のみを伴い、位置を表す表現と共に用いられていないことである。故に (13) におけると同様、(17)(18)においても、*κατάγειν* は「おろす」ではなく「倒す、滅

ぼす」の意味で捉えることが可能である。<sup>26)</sup>実際 LEH は (17) を (13) と並べて *κατάγειν* の先に示した「(或人を) 倒す (比喩的)」の語義の例として挙げ、また Muraoka は (17)(18) を *κατάγειν* の「(比喩的) 滅ぼす」(“fig. to destroy”<sup>27)</sup>) の語義のもとに例示している。

なお (13)(18) の *κατάγειν* は、次のウルガータ (Vulgata) からの (19)、古ラテン語訳 (Vetus Latina) からの (20) においては、それぞれ *deponere* に訳されている。

(19) ... disperge illos in virtute tua et *depone* eos protector meus Domine (VVLG. psalm. 58, 12)

(……あなたの力をもって彼らを散らし、彼らを滅ぼし (おろし) 給え、我が防御者である主よ。)

(20) in comminatione tua diminues terram et in indignatione tua *depones* nationes. (VET. LAT. Hab. 3, 12 (Tert. adv. Marc. 4, 39))<sup>28)</sup>

(あなたは、あなたの威嚇をもって地を打ち砕き、あなたの憤りをもって諸国民を滅ぼす (おろす) であろう。)

*deponere* は、次の (21)(22) において見られるように、*κατάγειν* と同じく、移動とかかわる「(人を) おろす」の意味と、移動とかかわらない「(人を) 滅ぼす」の意味の両方を持つ動詞である。

(21) Et *deposuit* illos per fenestram, (VET. LAT. Ios. 2, 15 (cod. 100))<sup>29)</sup>

(そして [ラハブは] 彼ら [2人の斥候] を窓からおろした。)

(22) et in multitudine gloriae tuae *deposuisti* adversarios meos misisti iram tuam quae devoravit eos ut stipulam (VVLG. exod. 15, 7)<sup>30)</sup>

(あなたは、あなたの偉大なる栄光をもって私に敵対する者たちを滅ぼした。あなたは、あなたの怒りを送り、それは彼らを藁のように食い尽くした。)

よって (13)(18) の *κατάγειν* が表す「倒す、滅ぼす」の意味は、それぞれ (19)(20) の *deponere* に反映されていると言える。<sup>31)</sup>

また (18) の *κατάγειν* は、次の (23) においては *deicere* に訳されている。

(23) In comminatione minorabis terram, ... Et in furore *deicies* gentes, (VET. LAT. Hab. 3, 12 (Aug. civ. 18, 32))<sup>32)</sup>

(あなたは威嚇をもって地を縮小するであろう。……怒りをもって諸国民を倒す (投げ落とす) であろう。)

*deicere* も、以下の (24)(25) におけるごとく、*κατάγειν* と同様、「(人を)

投げ落とす」という移動と関係する意味と、「(人)を倒す、殺す」という移動と関係しない意味の両方で用いられる動詞である。

(24) *habeo etiam dicere, quem . . . minorem annis LX de ponte in Tiberim deiecerit*; (CIC. S. Rosc. 100)<sup>33)</sup>

(私はまた、彼が……橋からティベリス川に投げ落とした、60才弱の男のことを言うことができる。)

(25) *accipe sanctum gladium munus a Deo quo deicies adversarios populi mei Israhel* (VVLG. II Macc. 15, 16)<sup>34)</sup>

(神からの賜物である聖なる剣を取れ。それによりあなたは、我が民イスラエルの敵たちを倒すであろう。)

故に (18) の *κατάγειν* の表す「倒す、滅ぼす」の意味は、(23) の *deicere* に反映されていると考えられる。<sup>35)</sup>

#### IV

本章では (13) の *κατάγειν* について、前章とは異なる解釈が可能であることを示したい。

Eusebius Caesariensis (339没) は (13) について述べる中で、以下のように *κατάγειν* を、移動の起点を表す句である “*τοῦ ἀξιώματος*” (地位から) を伴う *καθαίρειν* (引きおろす)、同じく “*… τιμῆς*” (……名誉から) を伴う *καταβάλλειν* (投げ落とす) と *καταφέρειν* (おろす) により言い換えている。

Ἀλλὰ γὰρ καὶ ταῦτα τὸ πνεῦμα τὸ προφητικὸν ἐκ προσώπου τοῦ Σωτήρος ἀναφωνεῖ περὶ τῶν ἐπαναστάντων αὐτῶ, περὶ ὧν ἐλέγετο· Καὶ λαοὶ ἐμελέτησαν κενά. Παρέστησαν οἱ βασιλεῖς τῆς γῆς, καὶ οἱ ἄρχοντες συνέστησαν ἐπὶ τὸ αὐτὸ κατὰ τοῦ Κυρίου καὶ κατὰ τοῦ Χριστοῦ αὐτοῦ. Τούτους οὖν τοὺς εἰς κενὸν τὰς περὶ αὐτοῦ προφητείας μελετήσαντας, τοὺς τε ἄρχοντας αὐτῶν καὶ καθηγουμένους μὴ ἀποκτείνης, φησὶν, ἀλλὰ διασκορπίσον καὶ κατάγαγε. Εὐχεται δὲ αὐτοὺς καθαίρεθῆναι τοῦ ἀξιώματος· . . . Οὐ γὰρ ἀπεκτάνθησαν, οὐδὲ ἐξ ἀνθρώπων ἀπεσβέσθησαν· ἀλλ’ εἰσὶ μὲν καὶ ὑφεστήκασιν· οὕτω δὲ ὡς καταβεβλημένοι καὶ κατενηνεγμένοι ἦς πάλαι ἠξίωντο παρὰ Θεῷ τιμῆς.<sup>36)</sup>

(まことにこれらも預言者の霊が救い主の立場から、自身に立ち向かう者たちについて、叫んだものである。彼らについては「民らは空しいことを思った。地の王たちは姿を見せ、君主たちは、主に対し、また彼の油を塗られた者に対し、一つに集まった」[詩篇2:1-2]と述べられている。よって、それらの者たち——彼についての預言を空しく思う者たち、彼らの君主たちと指導者たち——を「殺し給うな」、散らし、おろし給え、と言う。つまり彼らが地位から引きおろされるように祈るのである。……彼ら[王、祭司長、預言者]は殺されず、人々から消えず、存在し、残ったが、かつて神からふさわしいと見なされた名誉から投げ落とされ、おろされるに至った。)

また Theodorus Mopsuestenus (428没) は(13)の *κατάγειν* を、次のごとく、移動先を表す句である“*εἰς τὸν ἄδην*” (陰府へと) を補って解釈している。

*Κατάγαγε οὖν αὐτούς φησιν εἰς τὸν ἄδην, σὺ ὁ ἐμὸς βοηθός,*<sup>37)</sup>

(よって陰府へと「彼らを下らせ給え」、我が救助者であるあなた、と言う。)

さらに(13)の *κατάγειν* は、次の(1)とは別の古ラテン語訳からの(26)では *deducere* に訳されている。

(26) ... *Disperge eos in virtute tua; & deduces eos protector meus Domine;* (VET. LAT. psalm. 58, 12 (cod. 300))<sup>38)</sup>

(……あなたの力をもって彼らを散らし給え。あなたは彼らをおろすであろう、我が防御者である主よ。)

*deducere* は、以下の(27)に見られるように、「(人)をおろす、導く」という移動とかかわる意味を持つ動詞である。

(27) *et tunc ipse victis legionibus Romanis tuo consilio equitem ad pedes deduxeris restituerisque pugnam;* (LIV. 4, 40, 7)<sup>39)</sup>

(また、あなた自身、ローマの軍団が敗れたとき、自分の判断で騎兵隊を馬からおろし、戦闘を立て直したのかどうか。)

以上から(13)の *κατάγειν* は、「倒す、滅ぼす」の意味のみならず、「おろす」という移動とかかわる意味においても捉えることができるとわかる。<sup>40)</sup>

ではここで(19)の *deponere* の意味について再考してみよう。先に示したごとく *deponere* は、「滅ぼす」の意味だけでなく、「おろす」の意味でも用いられる。よって(13)の *κατάγειν* が「おろす」の意味でも捉えられるなら、その訳語の *deponere* もそうであるはずである。実際 Haymo (853



没) は以下のごとく、移動の起点を表す句の “*de superbia sua*” (彼らの傲慢さから) を添えて (19) の *deponere* を解釈している。

... *et incipit orare pro conversione eorum, dicens Deo: “Depone eos, protector meus Domine” de superbia sua.*<sup>41)</sup>

(……彼らの傲慢さから「彼らをおろし給え、我が防御者である主よ」と神に言い、彼らの改宗を祈り始める。)

また A. Bardani も (19) の *deponere* について、次のように同様の解釈をしている。

... *et de altitudine gloriae, et potentiae depone eos protector meus, Domine.*<sup>42)</sup>

(……(栄光と権力の高みから) 彼らをおろし給え、我が防御者である主よ。)

従って (19) の *deponere* を、*TLL* (s.v. *depono* II A4) のように「破壊する、滅ぼす、破滅させる」の意味で捉える<sup>43)</sup> のとは異なり、「おろす」という移動を表す意味で捉えることも可能であると言える。

## V

続いて (17)(18) の *κατάγειν* について「倒す、滅ぼす」以外の意味で捉えることが可能か考察する。

Eusebius Caesariensis は詩篇 55:8 に関連して、以下のごとく *κατάγειν* を、移動の起点を表す句の “*τῆς μεγαλαυχίας καὶ τῆς ὑψηλοφροσύνης*” (思い上がりと傲慢さから) を伴う *καταβάλλειν* (投げ落とす) により表している。

Σὺ δὲ, Κύριε, ἡ ἐμὴ ἐλπίς, ἐμὲ μὲν τῆς ἀδίκου αὐτῶν συσκευῆς ῥύσαι, αὐτοὺς δὲ μετελθὼν τῆ σεαυτοῦ ὀργῆ, κατάβαλε τῆς μεγαλαυχίας καὶ τῆς ὑψηλοφροσύνης<sup>44)</sup>

(あなた、我が希望である主よ、彼らの不正な企てから私を救い、あなたの怒りをもって彼らを追い、思い上がりと傲慢さから投げ落とし給え。)

また Theodorus Mopsuestenus も詩篇 55:8 について述べる中で、*κατάγειν* を以下のごとく、移動の起点を表す句の “... *ἀπὸ τῆς προσούσης*” (……権力から) と共に *καθαίρειν* (引きおろす) により表している。

*Καὶ τῆ οἰκεία φησὶν ὀργῆ σφοδρότερον κατ' αὐτῶν κινηθεῖς, ταπεινώσεις αὐτοὺς καὶ καθελεῖς ἀπὸ τῆς προσούσης αὐτοῖς δυναστείας*<sup>45)</sup>

(彼らに対する自らの怒りによりひどく突き動かされて、あなたは彼らを低め、彼らに属する権力から彼らを引きおろすであろう、と言う。)さらに(17)の *κατάγειν* は、ウルガータ (*Vulgata*) においては誤訳されているが、<sup>46)</sup>次の古ラテン語訳からの(28)においては、移動を表す動詞である *deducere* に訳されている。

(28) *Pro nihilo salvos facies eos: in ira populos deduces.* (VET. LAT. psalm. 55, 8 (cod. 300))<sup>47)</sup>

(あなたは決して彼らを救わず、怒りをもって民らをおろすであろう。)

(28)の *deducere* が移動について用いられた語として理解可能であることは、次の *Hilarius* (310頃~367/8) による解釈からも明らかである。ここでは(28)に見られる *deducere* が、場所を表す語である *quo* (…するところ) と共に言い換えられている。

*Sed, se gratiam aeternae promissionis inituro, inimici eius conuertentur retrorsum, ut, quo in ira deducerentur, ostenderet.*<sup>48)</sup>

(しかし彼は永遠の約束の恩恵を得て、彼の敵たちは「後退するであろう」[詩篇55:10]。それは「彼らが怒りをもって導かれる」ところを示すためである。)

よって(17)の *κατάγειν* は「おろす」という移動とかかわる意味でも理解できると言える。

次に(18)の *κατάγειν* は、(20)とは別の以下の古ラテン語訳からの(29)では *detrahere* に訳されている。

(29) *In comminatione imminues terram, et in furore detrahes gentes.* (VET. LAT. Hab. 3, 12 (Hier. *ad l.*))<sup>49)</sup>

(あなたは威嚇をもって地を縮小し、怒りをもって諸国民を引きおろすであろう。)

*detrahere* は、次の(30)におけるように、「(人)を引きおろす」という移動を表す意味を持つ動詞である。

(30) *In directum utrimque nitentes stantibus ac confertis postremo turba equis vir virum amplexus detrahebat equo.* (LIV. 22, 47, 3)<sup>50)</sup>

(双方でまっすぐ前に進もうとして、馬が止まり、結局混乱の中で密集すると、お互いにつかみ合って相手を馬から引きおろそうとした。)

(29)の *detrahere* が移動を表す語として捉えられることは、*Hieronymus* が(29)に続けて述べる次の解釈からも了解される。ここではこの *detrahere* が、

移動先を表す句の “*ad tartarum*” (地獄へと) を伴う *deducere* に、また移動先を表す句の “*in poenam*” (罰へと) が補われた *detrahere* に、言い換えられている。

*Potest hoc in consummatione mundi accipi, . . . et hi qui noluerunt esse de populo Dei, sed gentes et ethnici permanserint, furore Domini deducantur ad tartarum. . . . Si quis nostrum comminationem Domini reformidat huic terra imminuitur; qui autem perseuerat in gentium numero, et non uult esse de his quorum terra decrescit, nec de populo Dei, . . . iste cum gentibus detrahetur in poenam.*<sup>51)</sup>

(これは世の終わりについて理解される。……そして神の民に属することを欲せず、諸国民や異教徒として留まった者たちは、主の怒りにより地獄へと下らせられるはずである。……我らのうち主の威嚇を恐れる者には、地が縮小される。しかし諸国民の数のうちに留まり、自らの地が減ずる者たちに、また……神の民らに、属することを望まぬ者たちは、諸国民と共に罰へと引きおろされるであろう。)

また (18) の *κατάγειν* は、以下のさらに別の古ラテン語訳からの (31) においては、移動とかかわる意味を持つ動詞の *deducere* に訳されている。

(31) *In comminatione tua minorabis terram, et in furore tuo deduces gentes.* (VET. LAT. Hab. 3, 12 (Verec. in cant. 6, 14))<sup>52)</sup>

(あなたは、あなたの威嚇をもって地を縮小し、あなたの怒りをもって諸国民をおろすであろう。)

(31) の *deducere* が移動について用いられていると見なし得ることは、*Verecundus* (552 没) による次の解釈からも認められる。この解釈において (31) の *deducere* には、場所を表す語 *quo* (…するところへ) により導かれた節が補われ、さらに移動先を表す句の “*ad fidem*” (信仰へと)、同じく “*ad gratiam ueritatis*” (真理の恩恵へと) をそれぞれ伴う *deducere* により、(31) のそれが言い換えられている。

*In furore tuo deduces gentes, quo percussus est daemonum principatus, et idolatriae populus oblitus. . . . Deduces etiam per gratiam ad fidem, daemonibus amputatis. . . . Comitatu enim proprio Dominus spiritualiter suum populum antecedit, ut deduci possit ad gratiam ueritatis,*<sup>53)</sup>

(悪霊たちの支配者が打ち倒され、民が偶像崇拜を忘れたところへ「あなたの怒りをもって諸国民を導くであろう」。……悪霊たちは切り離

され、あなたは、さらに恩恵により信仰へと導くであろう。……主は常に同伴して霊的に自らの民に先行するが、それは真理の恩恵へと導かれるようにするためである。)

以上から(18)の *κατάγειν* は「おろす」という移動についての意味でも捉えることができるとわかる。

IV では、ギリシャ語による著述家の解釈およびラテン語訳を引用して、(13)の *κατάγειν* が「おろす」という移動にかかわる意味でも捉えられることを示した。本章で示したごとく、(17)(18)の *κατάγειν* ——(13)のそれと同じく、懲らしめる者としての神を主語、人を目的語とし、位置を表す表現を伴わない<sup>54)</sup>——が「おろす」の意味で捉えられるという事実もまた、(13)の *κατάγειν* が移動について用いられていると見なし得ることを裏付けるものである。

LXX の詩篇 58:12 における *κατάγειν* は、LEH が示すように「倒す、滅ぼす」という移動と無関係な意味で捉えられるのみならず、「おろす」という移動を表す意味でも捉えられる。それに対して、すでに見たように、その訳語の *destruere* は、文字通りに用いられる場合、「破壊する」の意味を持ち、この意味は移動とはかかわらない。またその訳語の *toweorpan* も、文字通りに用いられる際、「破壊する」の意味を表す。従って、LXX の詩篇 58:12 の *κατάγειν* に見られる移動についての意味が、そのラテン語の訳語の *destruere* には、さらにはその古英語の訳語の *toweorpan* には反映されていないと結論できる。

## 注

- 1) R. Weber, *Le Psautier Romain et les autres anciens Psautiers latins*, Collectanea Biblica Latina 10 (Roma, 1953). 古英語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、DOE (A. Cameron et al., *Dictionary of Old English: A to G on CD-ROM* (Toronto, 2008)) に従い、ラテン語のテキストのそれは、原則として、同辞典または TLL (*Thesaurus Linguae Latinae* (Leipzig, 1900-)) に従う。なお、頭に括弧付の番号を振った、古英語、ラテン語およびギリシャ語の引用文中のイタリック部分は、すべて筆者によるものである。
- 2) G. P. Krapp, *The Paris Psalter and the Meters of Boethius*, ASPR 5 (New York, 1932), p. 11.
- 3) それぞれのテキストは以下の通りである。A = *The Vespasian Psalter*, S. M.

- Kuhn (Ann Arbor, 1965); B = *Der altenglische Junius-Psalter*, E. Brenner, AF 23 (Heidelberg, 1908; Nachdr. Amsterdam, 1973); C = *Der Cambridger Psalter*, K. Wildhagen, Bib. ags. Prosa 7 (Hamburg, 1910; Nachdr. Darmstadt, 1964); D = *Der altenglische Regius-Psalter*, F. Roeder, Studien zur englischen Philologie 18 (Halle, 1904; Nachdr. Tübingen, 1973); E = *Eadwine's Canterbury Psalter*, F. Harsley, EETS 92 (London, 1889).
- 4) (1) の *destruere* は、D と E ではそれぞれ *tobrecan* (粉碎する) へ訳されている。
- 5) J. Lust, E. Eynikel, and K. Hauspie, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint*, rev. ed. (Stuttgart, 2003).
- 6) M. Godden, *Ælfric's Catholic Homilies: The Second Series, Text*, EETS s.s. 5 (London, 1979). (4) は BT (J. Bosworth and T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary* (Oxford, 1898)), s.v. *toweorpan* II の「(文字通りの意味で) 倒す」(“in a literal sense, *to overthrow*”) の (b) 「(立てられた物を) 引き倒す、(建物を) 破壊する、取り壊す」(“*to throw down what is set up, destroy a building, demolish*”) に挙げられている例である。
- 7) W. A. Falconer, *Cicero: De Senectute, . . .* LCL (Loeb Classical Library) 154 (1923), p. 84. (5) は *OLD* (P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary*, 2nd ed., 2 vols. (Oxford, 2012)), s.v. *destruo* 1 の「取り壊す」(“*To demolish, pull down*”) に挙げられている例である。
- 8) G. P. Krapp, *The Junius Manuscript*, ASPR 1 (New York, 1931), p. 138. (6) は BT, s.v. *toweorpan* III の「(比喩的意味で) 倒す」(“in a figurative sense, *to overthrow*”) の (a) 「(目的語が人の場合) 人の力を打ち砕く、滅ぼす」(“where the object is a person, *to destroy the power of a person, to destroy*”) に挙げられている例である。なお BT のこの語義には、問題の (2) も (この場合はラテン語原文と共に) 挙げられている。
- 9) B. Radice, *Pliny: . . . Panegyricus*, LCL 59 (1969), pp. 516–18. (7) は *OLD*, s.v. *destruo* 2 の「(転義) 滅ぼす、破滅させる」(“(transf.) *To destroy, ruin*”) に挙げられている例である。また (7) は *TLL*, s.v. *destruo* では IIB の「或人を、すなわち或人の力、権力、権威、境遇、評判を、砕く」(“*aliquem, i.q. vires, potentiam, auctoritatem, fortunam, famam alicuius frangere*”) に挙げられているが (vol. 5, pt. 1, p. 775, 10)、*TLL* の同じ語義には問題の (1) も挙げられている (p. 775, 24–25)。
- 10) W. J. Sedgfield, *King Alfred's Old English Version of Boethius De Consolatione Philosophiae* (Oxford, 1899). (8) は BT, s.v. *toweorpan* III(b) 「(目的語が人ではない場合、制度、慣習、規則、法などを) 打破する、廃止する、無効にする、取り消す」(“where the object is not a person, *to overthrow an institution, a prac-*

- tice, regulation, law, etc., *to put down, put an end to, destroy, make void, break, dissolve*”)に挙げられている例である。
- 11) J. H. Mozley, *Ovid: The Art of Love and Other Poems*, rev. by G. P. Goold, LCL 232 (1979), p. 86. (9)は(7)と同様 OLD, s.v. *destruo* 2に挙げられている例である。
- 12) W. W. Skeat, *The Gospel according to Saint Matthew and according to Saint Mark* (Cambridge, 1887, 1871; Nachdr. Darmstadt, 1970). (10)は(4)と同様 BT, s.v. *toweorpan* II(b)に(この場合はラテン語原文と共に)挙げられている例である。
- 13) R. Weber et al., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*, ed. quinta (Stuttgart, 2007).
- 14) J. W. Bright and R. L. Ramsay, *Liber Psalmorum: The West-Saxon Psalms, Being the Prose Portion, or the 'First Fifty,' of the So-Called Paris Psalter* (Boston, 1907).
- 15) T. Miller, *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*, pt. 1, 2, EETS 96 (London, 1891). (12)は(8)と同様 BT, s.v. *toweorpan* III(b)に(この場合はラテン語原文と共に)挙げられている例である。
- 16) B. Colgrave and R. A. B. Mynors, *Bede's Ecclesiastical History of the English People* (Oxford, 1969).
- 17) A. Rahlfs, *Septuaginta*, ed. altera (Stuttgart, 2006). LXXの書の略記は、H. G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, rev. by H. S. Jones, with a revised supplement (Oxford, 1996)による。
- 18) 本稿における生没年は G. W. H. Lampe, *A Patristic Greek Lexicon* (Oxford, 1961), R. Gryson, *Répertoire Général des Auteurs Ecclésiastiques Latins de l'Antiquité et du Haut Moyen Âge*, 2 vol. (Freiburg im Breisgau, 2007) または T. Wittstruck, *The Book of Psalms: An Annotated Bibliography*, vol. 1 (New York, 1994)による。
- 19) J.-P. Migne, “Euthymii Commentarius in Psalmos Davidis,” *Euthymii Zigabeni Opera Quæ Reperiri Potuerunt Omnia*, t. primus, PG 128 (1864), col. 609A–B.
- 20) (16)は T. Muraoka, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint* (Louvain, 2009), s.v. *ταπεινώω* 1の「低める」(“*to bring low*”)に引用されている例である。
- 21) Cassiodorus (583没)は以下のごとく、(1)の *destruere* を *construere* (築く)との対比で捉えており、移動を表す語とは捉えていない——“*Adhuc in hisdem supplicationibus perseuerat, ut destructi Iudaei in melius construantur sitque salutaris eleuatio post ruinam* (M. Adriaen, *Magni Aurelii Cassiodori Expositio Psalmorum I–LXX*, CCSL 97 (Turnholti, 1958), p. 526)”(「滅ぼされた(壊された)」ユダヤ人が、より良いものへと建てられるようにと、また滅びの後に救われて高められるようにと、なお同じ懇願に留まっている)。
- 22) LEH, s.v. *κατάγω*.

- 23) LXX の語句の検索には E. Hatch and H. A. Redpath, *A Concordance to the Septuagint*, 2nd ed. (Grand Rapids, 1998) を使用した。
- 24) (18) は Hatch and Redpath, s.v. *καταγύνναι* に挙げられている。
- 25) (18) は Muraoka の辞書において s.v. *κατάγνυμι* と s.v. *κατάγω* 3 の両方に挙げられている。
- 26) (13)(17) の *κατάγειν* は、共にヘブライ語原典の詩篇 56:8 と 59:12 における  $\eta\eta$  の Hiphil に由来している。これら 2 箇所 の  $\eta\eta$  の Hiphil は、F. Brown, S. R. Driver, and C. A. Briggs, *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament* (Oxford), s.v.  $\eta\eta$  Hiph. 1.c の「=平伏させる」(“=lay prostrate, prostrate”) に挙げられ、詩篇 56:8 のそれは「神が民らを倒すことについて」(“of God’s casting down peoples”) 用いられた例として示されている。よって同辞書に従えば、(13)(17) の *κατάγειν* が由来するヘブライ語も、「おろす」の意味ではなく——移動についての意味ではなく——「倒す、滅ぼす」の意味で捉えられる。
- 27) Muraoka, s.v. *κατάγω* 3. ここにおいて (18) は「あなたは諸国民を滅ぼすであろう」(“you will destroy nations”) という訳と共に挙げられ、(17) は類例の (sim.) 例として挙げられている。
- 28) A. Kroymann, “Aduersus Marcionem libri quinque,” *Quinti Septimi Florentis Tertulliani Opera*, pars 3, CSEL 47 (Vindobonae, 1906), p. 555.
- 29) U. Robert, *Heptateuchi Partis Posterioris Versio Latina Antiquissima e Codice Lugdunensi* (Lyon, 1900), p. 56. (21) は *TLL*, s.v. *depono* I の「より厳密な意味で、『下に置く』と同じ」(“strictiore sensu: i.q. deorsum ponere”) の B において、生き物 (*animantia*) を目的語とする例として挙げられている (vol. 5, pt. 1, p. 577, 31–32)。
- 30) (22) は *TLL*, s.v. *depono* IIA4 の「『破壊する、滅ぼす (……)、破滅させる』と同じ」(“i.q. demoliri, destruere (...), perdere”) において、人 (*aliquem*) を目的語とする例として挙げられている (p. 581, 5)。
- 31) (20) は注 30 に示した *TLL*, s.v. *depono* IIA4 において、事物 (*aliquid*) を目的語とする例として挙げられ (p. 580, 68–69)、(19) は *TLL* の同じ語義において、人を目的語とする例として (22) と並んで挙げられている (p. 581, 5)。すなわち *TLL* は (19)(20) の *deponere* を、共に「おろす」ではなく「滅ぼす」の意味で捉えている。
- 32) B. Dombart et A. Kalb, *Sancti Aurelii Augustini De Civitate Dei, Libri XI–XXII*, CCSL 48 (Turnholti, 1955), p. 625.
- 33) J. H. Freese, *Cicero: . . . Pro Sexto Roscio Amerino, . . .* LCL 240 (1930), p. 212. (24) は *OLD*, s.v. *deicio* 2 の「(人を高い場所から、しばしば極刑の一形態として) 落とす、投げ落とす、突き落とす」(“To cause (a person) to fall (from

- higher ground, freq. as a form of capital punishment), hurl down, push down”) に挙げられている例である。
- 34) (25) は *TLL*, s.v. *deicio* IB1b の「或人を、『倒す』と同じ。しばしば敵を殺害することについて、καταβάλλειν (倒す)」(“aliquem, i.q. prosternere, saepe de hoste interficiendo, καταβάλλειν”) に挙げられている例である (vol. 5, pt. 1, p. 396, 18)。
- 35) Augustinus (430 没) は (23) に続けて “quia eos, qui se exaltant, uindicando conlides” (なぜならあなたは、自らを高める者たちを罰して打ち砕くであろうからである) と述べ、(23) の *deicere* を *collidere* (打ち砕く) に言い換えており、この *deicere* を移動とかかわりのない語として捉えている。
- 36) J.-P. Migne, “Commentaria in Psalmos,” *Eusebii Pamphili, Caesareæ Palæstinæ Episcopi, Opera Omnia Quæ Exstant*, PG 23 (Paris, 1857; repr. Turnhout, 1979), col. 544C–D.
- 37) R. Devreesse, *Le Commentaire de Théodore de Mopsueste sur les Psaumes (I–LXXX)*, Studi e Testi 93 (Città del Vaticano, 1939), p. 388.
- 38) J. Blanchinus, *Vindiciæ Canoniarum Scripturarum Vulgatæ Latine Editionis*. . . (Romæ, 1740), p. 95.
- 39) B. O. Foster, *Livy: History of Rome, Books III–IV*, LCL 133 (1922), p. 386. (27) は *OLD*, s.v. *deduco* 6 の「(…から) 下へ動かす、引きおろす」(“To cause to move down (from), pull or draw down”) に挙げられている例である。
- 40) ちなみにフランシスコ会聖書研究所訳注『詩編』(中央出版社、1968) では、詩篇 59:12 は「……み力でゆさぶり、ひきおろしてください。……」と訳されており、(13) の κατάγειν の原語が「引きおろす」という移動を表す意味で捉えられている。
- 41) J.-P. Migne, “Explanatio in omnes psalmos,” *Haymonis Halberstatensis Episcopi Opera Omnia*, PL 116 (Turnholti), col. 392B.
- 42) A. Bardani, *Psalterium Davidicum Syntactica Paraphrasi*. . . ed. altera (Romæ, 1830), p. 207.
- 43) 注 30, 31 参照。
- 44) J.-P. Migne, PG 23, col. 496C–D.
- 45) Devreesse, p. 366.
- 46) (17) の κατάγειν は、ウルガータにおいては次の通り *confringere* (粉碎する) へと訳されている——VVLG. psalm. 55, 8: . . . in ira populos confringes Deus (……怒りをもって民らを粉碎するであろう、神よ)。J. F. Schleusner (*Novus Thesaurus Philologico-Criticus: sive, Lexicon in LXX*, ed. altera, 3 vol. (Glasguae, 1822), s.v. κατάγω) が言及するように (vol. 2, p. 168a–b)、Hieronymus (347/348 ~420) は、以下のごとく、(17) の κατάγειν は καταγύναι (粉碎する) と



誤解されたため、このように *confringere* へと訳されたと考えている——「ラテン語では『あなたは倒す（投げ落とす）であろう』すなわち *κατάξεις* の代わりに、*κατεάξεις* すなわち『あなたは粉碎するであろう』という誤りが不当に定着した」（“*et apud Latinos pro eo, quod est ‘deicies’, id est κατάξεις, male error obtinuit κατεάξεις, id est ‘confringes’* (I. Hilberg, *Sancti Eusebii Hieronymi Epistulae*, pars 2, CSEL 55 (Vindobonae, 1912), p. 263)”。実際 LXX の *καταγνύναι* が *confringere* へと訳された例は存在する。すなわち LXX *Ju.* 9.8: *καὶ κάταξον τὸ κράτος αὐτῶν ἐν τῷ θυμῷ σου* (あなたの怒りをもって彼ら [アッシリア人] の勢力を粉碎し給え)、LXX *Za.* 2.4: *καὶ τὸν Ἰσραὴλ κατέαξαν* (それら [ユダを散らした角] はイスラエルを粉碎した) における *καταγνύναι* が、それぞれ VET. LAT. *Iudith* 9, 11 (cod. 148 *al.*): *confringe potestatem eorum in ira tua* (P. Sabatier, *Bibliorum Sacrorum Latinae Versiones Antiquae*, 3 tom. (Remis, 1743; repr. Turnhout, 1976), tom. 1, p. 770) (あなたの怒りをもって彼らの勢力を粉碎し給え)、VET. LAT. *Zach.* 1, 21 (Hier. *ad l.*): *et Israel confregerunt* (M. Adriaen, “*Commentarii in Prophetas Minores*,” *S. Hieronymi Presbyteri Opera*, pars 1, 6, CCSL 76A (Turnholti, 1970), p. 760) (それらはイスラエルを粉碎した) において *confringere* に訳されている。よって Hieronymus の指摘する通り、(17) の *κατάγειν* の訳語としての *confringere* は誤訳であると言える。

- 47) Blanchinus, p. 90.  
 48) J. Doignon, *Sancti Hilarii Pictaviensis Episcopi Tractatus super Psalmos*, CCSL 61 (Turnholti, 1997), p. 158.  
 49) Adriaen, CCSL 76A, p. 638.  
 50) B. O. Foster, *Livy: History of Rome, Books XXI–XXII*, LCL 233 (1929), p. 352.  
 (30) は OLD, s.v. *detraho* 3 の「おろす、引きおろす、おりて来させる」(“To cause to descend, pull or force down; to induce to come down”) に挙げられている例である。  
 51) Adriaen, CCSL 76A, pp. 638–39.  
 52) R. Demeulenaere, “*Commentarii super Cantica Ecclesiastica*,” *Verecundi Iuncensis Opera*, CCSL 93 (Turnholti, 1976), p. 139.  
 53) Demeulenaere, p. 139.  
 54) (13) におけると同様、神を主語、人を目的語とし、位置を表す表現を伴わない *κατάγειν* の例を、LXX において (17)(18) 以外にさらに探すと、神の罰について用いられているものではないが、以下が見出される—— LXX *Is.* 9.2: *τὸ πλεῖστον τοῦ λαοῦ, ὃ κατήγαγες ἐν εὐφροσύνῃ σου, καὶ εὐφρανθήσονται ἐνώπιόν σου ὡς οἱ εὐφραϊνόμενοι ἐν ἀμύτῳ . . .* (あなたが、あなたの喜びのうちに下らせた大勢の民、彼らは収穫を喜ぶ者たちのように、……あなたの

前で喜ぶであろう)。この κατάγειν を Cyrillus Alexandrinus (444没) は以下のごとく、移動の起点を表す句の “ἐκ πλεονεξίας διαβολικῆς” (悪魔の貪欲から) を伴った ἀνακαλεῖν (呼び寄せる) および λυτροῦν (解放する) により解釈している——“Τὸ δὲ Κατήγαγες, ἀντὶ τοῦ, Ανεκαλέσω, τέθεικεν, καὶ Ἐλυτρόσω, καθάπερ αἰχμαλώτους ἐκ πλεονεξίας διαβολικῆς γεγεννημένους (J.-P. Migne, “Commentarium in Isaiam Prophetam,” *S. P. N. Cyrilli Alexandriae Archiepiscopi Opera Quae Reperiri Potuerunt Omnia*, PG 70 (Paris, 1859; repr. Turnhout, 1987), col. 249A)” (“[あなたが] 下させた”を「呼び寄せた」「解放した」の意味で記している。悪魔の貪欲から捕らわれていた者たちをそうしたかのように)。さらにこの κατάγειν は、次の古ラテン語訳においては、移動について用いられる動詞である deducere に訳されている——VET. LAT. Is. 9, 3 (Hier. *ad l.*): Plurimam partem populi deduxisti in laetitia tua; . . . (M. Adriaen, “Commentariorum in Esaiam Libri I–XI,” *S. Hieronymi Presbyteri Opera*, pars 1, 2, CCSL 73 (Turnholti, 1963), p. 124) (あなたは、あなたの喜びのうちに、大勢の民を下らせ、……)。以上から LXX Is. 9.2 の κατάγειν も、(13)(17)(18) のそれと同じく、移動について用いられていると解釈できる。Muraoka もこの κατάγειν を、κατάγω 2 の「連れ戻す」(“to bring back”) の下に挙げ、「追放から呼び戻す」(“to recall from banishment”) という解釈を示して、移動の意味で捉えている。

## On Old English *toweorpan*, Latin *destruere* and Greek *κατάγειν*

Satoru ISHIHARA

The Latin *destruere* “to destroy” in *disperge illos in uirtute tua et destrue eos protector meus Domine* (PsRom 58:12) “scatter them by thy power and destroy them, my protector, Lord” is rendered in the Old English version by *toweorpan* “to destroy”: . . . *and hi wraðe toweorp, wealdend min drihten* (PPs 58.11) “. . . and destroy them in anger, my ruler, Lord.” The *destruere* is derived from the *κατάγειν* in . . . *καὶ κατάγαγε αὐτούς, ὁ ὑπερασπιστής μου κύριε* (LXX Ps. 58(59).12) “. . . and destroy them—or bring them down—my protector, Lord,” where the *κατάγειν* is accompanied by the object alone and therefore can be interpreted as “to bring down (metaphorically)” as in J. Lust et al., *A Greek-English Lexicon of the Septuagint*.

Eusebius Caesariensis, on the other hand, interpretes the *κατάγειν* as *καθαίρειν* “to bring down” followed by a phrase expressing the starting-point of movement: *Εὐχεται δὲ αὐτούς καθαίρεθῆναι τοῦ ἀξιώματος* “He prays that they should be brought down from the rank.” And Theodorus Mopsuestenus supplements the *κατάγειν* with a phrase expressing the place reached: *Κατάγαγε οὖν αὐτούς φησιν εἰς τὸν ᾅδην, σὺ ὁ ἐμὸς βοηθός* “Therefore he says ‘bring them down’ to Hades, thou, my helper.” Moreover the *κατάγειν* is rendered by *deducere*, which has the meaning “to bring down (literally),” in . . . *& deduces eos protector meus Domine* (VET. LAT. psalm 58, 12 (cod. 300)) “. . . and bring them down, my protector, Lord.” Thus the *κατάγειν* can be interpreted as “to bring down (literally)” as well and be regarded as being used of locomotion.

However, *destruere*, when used literally, has the meaning “to demolish,” which is irrelevant to locomotion, and *toweorpan* also has the sense when used literally. We can therefore conclude that the meaning “to bring down (literally)” of the *κατάγειν* in Ps. 58:12 in the Septuagint is not reflected in the *destruere* in PsRom 58:12 nor in the *toweorpan* as its equivalent.